

# 現代の音楽教育 その理論と実践 (Ⅵ)

渡辺 学・久枝 隆子

## Contemporary Music Education

Theory and Practice (Ⅵ)

Manabu WATANABE and Takako HISAGAE

### はじめに

ここ数年来、熊本県各地の学校現場において音楽劇をすることが増えてきてはいるようである。また、学校行事としての音楽会、学習発表会にミュージカル、オペレッタなどと称して、音楽劇が催されることは、潜在的にはあるがそれ以前においても少なくはなかった。しかし、それらの音楽劇が必ずしも音楽科のカリキュラムの延長上に、あるいは、音楽科の指導計画のなかに位置付けられ、ミュージカルをすることが、クラスの子ども一人一人にとって、創造的であり、音楽によってする「喜び」であると確信できる事例にはなかなか出会えないのである。

今回、幸いにも、市内の小学校6年生2クラスをかりて、即興的にするミュージカル作りに立ち合うことができたのであるが、その実践と反省を通して、学校における音楽科で児童が主体的に音楽することの意味について多くのことを教えられたし、またこれまで行ってきた実践や考察に加除修正すると共に、その大筋において的を得ていたことを確信したのである。すなわち、子どもが主体的に取り組みやすい活動、あるいは子どもが身に付けるべき音楽する姿勢——それを保証してやれる教師の姿勢——すなわち、音楽科における子どものあり方（学習態度）は即、教師の姿勢によるのであり、それと同時に、教材のあり方——さらには教材をどうとらえるか、そのことはつまり児童観、教師論、そして教材観——それらを明らかにすることが教育学部における音楽科教材研究、及び音楽科教育法の主たる内容であるということになる。

以下、それらの経緯について順をおって考究したい。

### I

平成2年2月5日～3月3日の約1ヶ月にわたり、熊本市立碩台小学校の6年生と共に「即興ミュージカル」を作る機会に恵まれたので、ここにその実践の内容及び考察を記す。

#### 1. 実践の動機

「ミュージカル」は、あらゆる表現手段を総括することが可能であることから、その教材として

の価値が評価されると思うが、ことの起こりは、「少しでも楽しく音楽を！表現を！」というこどもの立場にたった思想であった。しかし、ここで私達がもっとも恐れるのは、教師特有の使命感から「少しでも上手く！」と、技術を伸ばすことに目的が移り、それがエスカレートすることによって、こどもが教師という演出家の踏み台として成り下がってしまうことである。いかに「ミュージカル」が見る人を楽しませ、教師の職業意識を刺激するものであっても、演じるこども自身が「楽しく」なければ、新しい教材として世に問う意味は全くない。

既に多く述べたような、「合唱」や「器楽」の二の舞にならないためにも、「ミュージカル」を創作表現の教材として考え、常に手探りではあったが実践を重ね、論文、資料または口頭によって報告してきた。（「手探り」というのは、常にその結果が予想できない状態で試行錯誤しながら——という意味だが、それは私達の研究における信条でもある。）目的は、その方法論を固定することではなく、実践を通して、子どもが音楽の授業で何を欲しているのかを知ることであり、もっと言えばこどもを知ることにあった。今回の実践においても、私達は、こどもについて新しい発見や確認をしたが、最も考えさせられたことは、こどもが教師に何を求めているかということであった。

ここでは、これまで「熊大公開講座」や「八代オルフの会」で実践してきた“即興ミュージカル”（台本や楽譜の介在しないミュージカル）を小学校の普通学級でどのように展開し得るか、また、学校現場における「ミュージカル」のあり方、そして、こどもの自主的な創作活動に対する教師の役割について明らかにしたい。

## 2. 対象児童について

熊本市立碩台小学校6年生（1，2組合同 計60人）。

碩台小学校は伝統ある音楽教育実践校で、特に歌唱に重きをおいているため、その一環としての音楽劇に長年にわたって取り組んできた。恒例となったひなまつりの発表会に向けての約1ヶ月間、学年ごと（1または2クラス）に題材を選び、創作または既成の台本にそって練習が行われ、それらはそれぞれの担任の意向によって進められる。今回のこども達は、過去5回のひなまつり音楽会を経験し、卒業直前の最後の発表会で、これから報告するような“即興ミュージカル”を作ったわけであるが、実はこのこども達の半分は、3年前に臨時採用講師をしていた筆者の一人が受け持った児童（当時3年生）であった。その時は、「動き」と「即興的創作」の実践の総括としての音楽劇「おにの話」をこどもと共に作った。これは教室でする小規模なものであったが、こどもの手による台本、音楽（テーマ曲のみ教師が作曲）そして演出で貫いたことに充分価値があった。それをきっかけにこどもの可能性を信じていることができるようになったと言っても過言ではない。

その翌々年（5年生）、偶然にも音楽科の卒業生の一人が音楽専科としてこの学校に赴任し、「創作」や「即興表現」に意欲的に取り組んだことや（図形楽譜による創作、ダンスの創作、民族楽器トングトンによる即興、群読、お囃子づくり等）、担任の先生が、こども達だけで「クラスの歌」を作らせたり、音楽劇の題材をこどもの作った物語「朝顔と夕顔」からとる等して「自ら作ること」の楽しさを主張されたということを知り、今回の話をもちかけずにはいられなかった。

## 3. 実践の経過

実践の経過は、大筋（表1）のようである。約1ヶ月にわたって、音楽や学活の時間を中心に、のべ16時間（11日）を費やした。

（導入）

はじめの3時間は、導入として用意した5つの題材を、それぞれクラスの反応によって適当に選択

(表1)

日(時間)		経 過
2/5 (1)	導 入	手作りミュージカル宣言 アンケート調査(資料1) 導入1「動きのカノン」
9 (1)		導入2「パーカッションコンサート」 導入3「歌の即興リレー」
14 (1)		導入4「音と動きのドラマ」 導入5「バンブーダンス」 *1組…導入2, 3, 4, 5 2組…導入4, 5 (15日以降は合同)
15 (1)		オリ テ ィ ミュージカルの構成についての理解(資料2) 希望調査(何幕に出たいか、第2希望まで) テーマ曲その1「時間と空間を越える旅」(譜例1)の初練習
19 (2)		班 別 プ ロ ジ エ ク ト 班分け発表 班別プロジェクト
22 (2)	班 別 プ ロ ジ エ ク ト テーマ曲その2「南の島の同窓会」(譜例2)の初練習 班別プロジェクト 第1回中間発表	
26 (2)	班 別 プ ロ ジ エ ク ト 今回のミュージカルの主旨及び構成についての確認(資料3, 4) 班別プロジェクト 第2回中間発表(体育館ステージ)	
27 (1)	班 別 プ ロ ジ エ ク ト 班別プロジェクト	
28 (2)	班 別 及 び 全 体 練 習 つなぎ, オープニング, エンディングの理解 班別プロジェクト 第1回通し練習(体育館ステージ)	
3/1 (2)	班 別 及 び 全 体 練 習 衣装合わせ 班別プロジェクト 第2回通し練習(体育館ステージ)	
2 (1)	班 別 及 び 全 体 練 習 リハーサル(体育館ステージ)	
3	本 番 「ひなまつり音楽会」において上演(体育館ステージ)	

した。

導入1「動きのカノン」——日常の何気ない行動を題材に、動きのカノンを作り、言葉によるコーラスで伴奏する。

導入2「パーカッションコンサート」——簡単なオスティナートの合成による即興的アンサンブルで、楽器の紹介を兼ねる。

導入3「歌の即興リレー」——即興で物語の断片を作って歌い、それをリレーして物語を完成させる。

導入4「音と動きのドラマ」——短いストーリーを音と動きのみで表現する。

導入5「バンブーダンス」——簡単なステップによるカノン。

これらは、グループによる創作、動き、器楽、即興等、通常の音楽の授業で不足しているであろう要素がおりこまれ、後の「即興ミュージカル」への予備練習となっている。

(オリエンテーション)

プリント(資料2)によって、ミュージカルの枠組みを理解させ、具体的に何幕のプロジェクトに参加したいか、希望調査(第2希望まで)を行った。この1～4幕の内容及びテーマ曲「時間と空間を越える旅」の歌詞は、初日に行ったアンケートの、「あなたの将来の夢は何ですか?」に対するこどもの記述をもとに、構成されている。

(班別プロジェクト)

この班別プロジェクトこそが、今回の実践の中心であり、まさに即興的にミュージカルを作っていく時間である。この活動のために可能な限りの時間を確保するよう努めた。こどもの希望をもとに編成した4つの班(15人前後)に分かれ、それぞれが別の教室で創作活動を行うようにした。途中何度か発表会を設けることによって、こども達が互いに刺激し合い、創作意欲をそそり合うことをねらった。練習も軌道に乗り出した頃に、もう一度今回のミュージカルの主旨を理解させ(資料3)、構成については、オリエンテーションの時よりもさらに具体的な内容を示し(資料4)、本番に向けての心構えを促した。班別プロジェクトは本番2日前まで続き、ぎりぎりまで作品の手直しが行われた。

(全体練習)

本番前3日間の通し練習において、各幕のつなぎ、オープニング及びエンディングなどの手順を指導し、また、ステージで演じる際の留意点を指摘するなどして、全体の仕上げをしていった。

(本番)

当日の「ひなまつり音楽会」では、全校児童、職員、そして多数の保護者の見守る中、最後のプログラムとして上演された。

(資料1)

アンケート	名前
1 あなたの将来の夢はなんですか? (かないそうもない本当に夢のようなことでもいいですよ.)	
2 今度のミュージカル(音楽劇)づくりで、どんな仕事をしたいですか? 次から選んで番号に○をつけてください。(いくつでもいいです.)	
1 衣装を作る.	
2 背景の絵を描く.	
3 小道具を作る.	
4 踊りを作る.	
5 台本を作る.	
6 演出(演技を指導するなど、練習の時リーダーとして頑張る)をする.	
7 音楽を作る.	
8 その他 [ ]	
3 みんなでミュージカルを作る時どんなことに注意したらいいと思いますか?	
4 ミュージカル作りに関して、質問、注文などがあれば書いてください.	

(資料 2)

[プロローグ]  
 20年後の古川先生と中元先生。古川先生は退職してラーメン屋をしている。中元先生は、もちろん結婚して幸せ。  
 今日と同窓会。20年前に碩台小を卒業した教え子達が書いた作文「私の夢」について話している。

[第一幕]  
 博士になってロボットを作る。

[第二幕]  
 大会社の社長になって大金持ちになる。  
 お金第一主義の社長とそのとりまき。  
 小さなかわいいお店を持つ。 } この違いを明らかにする。  
 手作りの物を安く売っている。 \_\_\_\_\_

[第三幕]  
 魔法使いになっていたずらをする。

[第四幕]  
 世界中を旅行する。  
 ここは南の島。原住民がバンブーダンスを踊っている。  
 そして同窓会はこの南の島で行われたのであった。

お わ り

(資料 3)

6年生ミュージカル 名前  
 [ミュージカルを作るにあたって]  
 今年のミュージカルは、今までのやり方とは違います。

- ・台本がない——だから、劇をしながら「今こう言ったらいいな。」と思ったら、ためらわずにその言葉を言うのです。言いたいことを言いたい時に言ってください。そうやって少しずつ台詞を決めていくんだけど、本番は全然違った言葉がでてきてもそれはそれでいいことにします。
- ・先生が指図(さしず)しない——あなたたちが自分たちのアイディアを出し合って作るのです。先生はお客さんとして時々見学に来て感想を言います。
- ・音楽も作る——歌、踊りの曲、効果音などを、楽譜などに書かなくていいから、実際に歌ったり、楽器をならしたりして作ってみましょう。はじめの所だけ、リズムだけ、歌詞だけ、そんなふうでいいのです。そして続きの作り方を先生に相談してください。
- ・時々班別に発表する——思い切って演じてください。他の班のいいところをたくさん見つけましょう。ビデオに録画し、その日のうちにみんなに見せます。どうしたらもっと良くなるか考えて次の日の練習に生かしましょう。

(資料 4)

[構成]

テーマ曲	・全員で歌う ・ピアノ、木琴、シンバル、バスマスター等による伴奏(希望者6人程度、ただし1班以外の人)	・歌う人は全員ステージの上 ・後奏で幕が閉まり1班が準備をする
プロローグ	・20年後の古川先生と中元先生 ・これから同窓会に行くところ ・20年前に子供達が書いた作文について話す	・後奏が終わらないうちに2人幕前にスタンバイ
第一幕	・碩台小の卒業生の一人が有名な博士になってロボット(友達ロボット)を作る話	・笛の演奏(希望者)をバックに、作文「僕の夢」が読まれる。その途中から幕が開く

		が開く ・幕が閉じ、2班が準備をしている間笛の演奏をバックに作文が読まれ、幕が開く
第二幕	・卒業生の一人が大会社（ガッツ工業）の社長になり、また別の一人はそのすぐ隣に小さなかわいい店をもった。 ・ガッツ工業は自分の会社を大きくするために小さな店にたちのきを要求するが…	
第三幕	・卒業生の一人はなんと魔法使いになって、いたずらばかりしている ・バナナの皮のいたずら ・おじさんのかつらを取るいたずら ・道に接着剤を流すいたずら	・幕が閉じ、3班が準備をしている間笛の演奏をバックに作文が読まれ、幕が開く
第四幕	・卒業生の一人は旅行会社に勤めて、「南の島同窓会ツアー」を企画する ・その南の島に住んでいる原住民が楽しく踊っているところに海賊が現れ…… ・「同窓会ツアー」の一行が到着する	・幕が閉じ、4班が準備をしている間笛の演奏をバックに作文が読まれ、幕が開く ・1班以外の人は全員ステージの上
フィナーレ	・「南の島の同窓会」の歌と合奏とバンブーダンス ・テーマ曲の一部を歌って、少し言葉を言って終わり	

#### 4. 作品の成立過程

“即興ミュージカル”は、出来合いのそれを覚えて間違わぬようにするのは違って、作っていく過程（主に班別プロジェクトの時間）に意義がある。ましてや「即興」であるから、あらかじめ台本や楽譜を作るのではなく、大体の筋を決めた後は、実際に身体を動かしながら、即興的に出てくる台詞や動き、そして音楽を少しずつ固定していくという方法であり、途中何度か行った中間発表の場においても即興的な表現で試行錯誤している様子がうかがえた。その具体的な例を（資料5）に示した。

これは、第3幕のある一場面が、発表会ごとに少しずつ肉付けされていく過程である。2月22日の第1回中間発表では、一人一人の台詞が短く、筋を追うのに精一杯であるのが、2回3回と回を追うごとに、より自然に会話らしくなっていく。それぞれのこどもが、毎回違う台詞を試しながら気に入った表現を選んでいくのである。（このようなやり方でいくと、毎回同じ台詞を言うのがしんどくなることさえある。）また、話を面白くするために、途中から登場人物を増やしたり（ここでは待ち合わせをしている彼女）、話の筋をより正確に伝えるためにナレーションを加えるなどの工夫が見られる。

音楽に関しては、第2回中間発表から、簡単な効果音（バナナで滑る音、殴る音）が入ってきて、これらは、演技者の動きをよりリアルに見せるとともに、演技者自身もその気になって動くことができたようである。3月1日の第2回通し練習では、はじまりの音楽（譜例3）や、魔法使いの歌（譜例4）が加わり、いよいよミュージカルらしく形が整ってきている。

このようにして台詞や音楽が充実していくのと同じように、動きも徐々に洗練されていったし、小道具や衣装などもそれぞれのこどもがあるものを持ち寄って少しずつ揃えていった。

## (資料5)

## 2月22日 (第1回中間発表)

ヘビメタ	ほうきでギターを弾く真似をしながら、 「今日ものってるぜ、ベイビー。」
体操選手	屈伸運動をしている。 「1, 2, 3, 4。」
男	腕時計を見ながら 「おせーなー。」 学生が本を読みながら歩いてくる。
魔法使い①	「あ、人間だ。」
魔法使い②	「よし、このバナナの皮でいたずらしてやる。」
魔法使い①	「よし。」 魔法使いが投げたバナナの皮で、学生が滑ってヘビメタに、ヘビメタが体操選手に、体操選手が男にぶつかって、4人とも引っ繰り返る。
男	立ち上がって体操選手の胸ぐらをつかみ、 「いてーじゃねーか。」 体操選手を殴る。
体操選手	「すみません、すみません。」 ヘビメタの胸ぐらをつかみ、 「お前ねー。」 ヘビメタを殴る。
ヘビメタ	「すみません。」 学生を追い掛ける。 「てめー、待てよー。」 学生はヘビメタから、ヘビメタは体操選手から、体操選手は男から追い掛けられる。
魔法使い①	「よし、成功だ。」
魔法使い②	「面白かったな。」
魔法使い①	「次はどんないたずらをしよう。」

## 2月26日 (第2回中間発表)

ヘビメタ	ほうきでギターを弾く真似をしながら、 「今日は調子がいいからガンガンいこうぜ。」
体操選手	屈伸運動をしている。 「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, いい調子。」
男	腕時計を見ながら 「おせーなー、まだかよ。」 学生が本を読みながら歩いてくる。
魔法使い①	「あ、人間がまた来たぞ。」
魔法使い②	「このバナナの皮でつかさうぜ。」
魔法使い①	「よそうよ、兄ちゃん。」
魔法使い②	「いや、これを落としたり面白ってば。」 魔法使いが投げたバナナの皮で、学生が滑ってヘビメタに、ヘビメタが体操選手に、体操選手が男にぶつかって、4人とも引っ繰り返る。(ピアノのグリッサンドとビブラスラップによる効果音)
男	体操選手の胸ぐらをつかんで、 「いてーじゃねーか。」 体操選手を殴る。(シンバルによる効果音)
体操選手	「すみません。」 ヘビメタの方を向いて、 「お前なー、ヘビメタかなんか知らねーけど、人の身体に触るんじゃねーよ。今度から気を付けな。」 ヘビメタが向こうを向くと、

「まだ話は終ってねーよ。」  
 ヘビメタを殴る。(シンバルによる効果音)  
 ヘビメタ 「てめー、俺様にこんなことしていいと思ってんのか。」  
 学生 「このバナナが悪いんです。」  
 ヘビメタ 「そんなことは言い訳にならねー。てめー、待てー、こら。」  
 学生はヘビメタから、ヘビメタは体操選手から、体操選手は男から追い掛けられる。  
 魔法使い 「やったー、大成功だ。」

## 3月1日(第2回通し練習)

(ピアノと木琴によるはじまりの音楽)(譜例3)  
 ナレーター 「ある豊かな町に、いたずら好きな魔法使いがやってきました。さて、どんなことが起きるでしょうか。」  
 ヘビメタ ほうきでギターを弾く真似をしながら、  
 「今日ものってるぜ、ベイビー。」  
 体操選手 屈伸運動をしている。  
 「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, いい調子。」  
 男 腕時計を見ながら  
 「遅いなー、彼女。」  
 魔法使い (魔法使いの歌)(譜例4)  
 魔法使い① 「このバナナうめえな。」  
 魔法使い② 「うん。」  
 学生が本を読みながら歩いてくる。  
 魔法使い① 「あ、また人間が来たぞ。」  
 魔法使い② 「このバナナの皮でいたずらしよう。」  
 魔法使い① 「よし、やろう。」  
 ナレーター 「魔法使いは道端にバナナの皮を置きました。」  
 魔法使いの投げたバナナの皮で、学生が滑ってヘビメタに、ヘビメタが体操選手に、体操選手が男にぶつかって、4人とも引っ繰り返る。(ピアノのグリッサンドとビブラスラップによる効果音)  
 男のかつらが取れて、はげ頭があらわになる。  
 彼女 走ってきて、  
 「あー、あんたかつらだったの。もう結婚してあげない。」  
 男 「おい、待ってくれよー。」  
 体操選手の胸ぐらをつかんで、  
 「てめー、彼女が逃げちまったじゃねーか。どうしてくれんだよ。」  
 体操選手を殴る。(シンバルによる効果音)  
 体操選手 「すみません、すみません。」  
 ヘビメタの方を向いて、  
 「お前な、この暑いときに俺の身体に触るんじゃねえ。今度から気をつけるよな。」  
 ヘビメタ 「悪かったな、おっさん。」  
 体操選手 向こうを向くと、  
 「まだ話は終っちゃいねー。」  
 ヘビメタを殴る。(シンバルによる効果音)  
 ヘビメタ 学生の方を向いて、くしで髪を整えながら、  
 「てめー、俺のヘアスタイルに何てことをするんだ。服も汚れたぜ。」  
 学生 「このバナナが悪いんです。」  
 ヘビメタ 「そんな理由になるか。」  
 学生はヘビメタから、ヘビメタは体操選手から、体操選手は男から追い掛けられる。  
 魔法使い 「大成功！」

これはある班の創作の一部にすぎず、これとほぼ同じ密度で、4つの班がそれぞれに創意工夫を重ねていったのである。



このような活動の過程では、作品の成長とともに、子ども達自身が成長していることを強く言いたい。子どもが今やってみたいことを、少しずつ少しずつ、できる範囲で試してみる、単にそのことを繰り返すことが、もっとも自然なかたちで子どもの能力を引き出すことになるのではないだろうか。子どもの力を引き出すと言いながら、教師の一方的な欲求によって子どもが訓練され、子どもを踏み台に教師だけが成長していく（教師として成長しているかどうかは別として）ような例は少なくない。創作に限らず、音楽は自らの欲求によって行わなければならない。特に子どもの場合は、将来こうなりたいというよりは、今やりたいことがある、やらずにはいられないという衝動からされる経験こそが重要であろう。そのような機会をいかにして作るか、また、機会を与えた後どのように子どもに関わるべきか、次項では、そのような教師の役割について述べてみたいと思う。

### 5. 子どもに創造的活動をさせる上での教師の役割

子ども達が自分達だけで活動する時間を少しでも多く確保するため、教師の出番は最小限に押さえるよう心がけた。毎回はじめの5分程度を使って、今子ども達が共通に抱えている課題を明らかにし、その解決へのヒントを促す以外は、プリントや班ノートによって意志の疎通をはかった。子どもが自主的に活動しているとき、むやみに割り込むことはせず、子どもの方から相談にきた場合は一緒になってその解決方法を考えるようにした。また、頃合をみて発表（中間発表）の機会を作り、感想を言うのだが、「こうすればもっと良くなるのに」という大人の要求を簡単に吐き出すことは極力控えた。

このようなやり方においては、いわゆる教師主導型の授業に比べて、教師の表面だっけの働きかけが非常に少ない。しかし、その分、その少ないチャンスに何をすることが重要になってくるし、そのためには、子どもが何を欲しているのか、子どもの内面までの観察を慎重かつ確実に行わなければならないであろう。今回は8ミリビデオに子どもの活動を収録し、あとは班ノートや子どもとの直接の会話を通して、子ども達の間で起こっている事実を正確に把握しようとしたのだが、どこまでそれが達成されたかは疑問である。なぜなら、子ども達は、教師のいないところでこそ、のびのびと創造や表現をするからである。

それを裏付けるような子どもからのある訴えがあった。本番まであと1週間という日、他の班に比べて進み具合が遅れているある班に対し、担任の先生が見るに見かねて簡単な指導をされた。その班はまだ物語がしっかりと決まっておらず、会話の流れも途切れ途切れであったのを、先生がなんとかまとめようとされたのだが、それが気に入らなかったらしい。子ども達が言うのには、先生がいると自分たちの意見が言いにくい、どうしても先生の言うとおりにになってしまう——そこで私は少なからず自信をもって尋ねた。「先生（私）なら何も言わないから、そばにいてもいいでしょう？」ところが返ってきた言葉は「いや、先生は誰でもいるだけで邪魔。」

シェーファーの言った「教室の扉」とはこのことだと、その時思った。「挑発的、支配的、実物より大きく見える、先生こそ扉だ。」「創造課程の教室では先生は自分自身の消滅をはからなければなりません。」実感としてこれらの文章をうけとめることができた、すばらしい経験であったと思う。それから、班活動をのぞきについて内側から窓をピシャリと閉められたり、踊りを作っているところに口を出して、「何それ、だしゃー（ださい）。」と呆れられたりしながら、「本当によけいな口出しはやめよう。」と肝に命じた日々であった。

こんな風に子どもと関わってみて、筆者なりに、子ども達に自主的な創作活動をさせる上での教師の役割をまとめたみた。

1. 適切な課題を与える
2. こどもを観察する.
3. 集団的生活をオーガナイズする
4. 上演に際して、作品の全体的な構成をする

こどもの創造的活動を始動し、回転させるために、そのきっかけとなるような課題を与えてやらなければならない。

- ・ 1ヶ月後の「ひなまつり音楽会」で手作りミュージカルを上演しよう
- ・ 短い物語を音と動きだけで表そう
- ・ 日常の何気ない行動を題材に、動きのカノンを作ろう

このような大きな課題から始まり、こどもの創作活動が始まった後は、

- ・ 各班とも、かならず1曲以上歌を作ること。ただし、楽譜には書かなくていいし、どんなに短くてもいい
- ・ 幕の開け閉めは、観客の注意が散漫にならないよう、各班一回に抑えること
- ・ 各班4分以内にまとめること（4班で持ち時間20分しかなかった）

等の細かい点についての課題がその時その時のこどもの状況に応じて与えられるべきであろう。さらには、その進み具合や内容が、班や個人によって異なってくるので、たとえば

- ・ 2班は「ガッツ工業の歌」に少し振りをつけてはどうでしょう
- ・ ○○さんの歌いやすいように少し移調してください

等の課題を班ノートや個人カードによっても伝えることができる。このような課題は、こどもにとって易しく、そのこどもの現在の欲求にかなっていることが大切であり、そのためには、教師がこどもの活動を観察し、その内面までも知ろうと努力しなければならないだろう。

そこで、こどもの活動の中にどのような形で入っていくかであるが、先にも述べたように、教師は所詮目障りな存在であることをよく自覚した上で、時折、カメラマン（記録者）や単なる客人として観察させてもらうか、あるいは、教師の殻を全て脱ぎ去り学習共同体の一人として参加するのだが、後者は非常に難しい試みであると思う。（今回そうありたいと思って望んだが、前述したようにやはり教師は教師でしかなかった。しかし、次の実践では、学習共同体の一人となるようにしたいと思っている。）しかし、こどもが教師を頼ってきた場合は、そのこどもが抱えている問題の解決につながるような一つの課題をその場で与えてやらなければならないから、こどもを観察することと適切な課題を与えることが即応して行われる必要があるだろう。こどもにどう関わるか、その内容はもちろん、度合い、タイミングといったものは、非常に曖昧にしか言えないが、単に教師の技量というよりは、教師としての思想が左右するように思われる。

また、こどもの創作活動を見守る傍ら、全体の進行状態を、発表会に向けて調整していくことも教師の重要な役割である。スケジュール表を作り、ステージ練習の割り振り、楽器の配分を行うなど、全体の交通整理をしたり、時々発表会を設け、そのビデオを見せたり、参考になるビデオを見せるなどして、適度な刺激を与える。こどもは、全体や、将来の見通しが立ちにくいので、大人がある程度コントロールし、それを集団的にオーガナイズする必要があるだろう。

さらには、上演に向けて、どのように始めるか、また終わるか、幕間のつなぎをどうするか等、全体の構成を決定したり、全員で歌う挿入歌を作詞、作曲したりと、創作的な仕事もいくらかあることは覚悟しておかなければならないだろう。もちろん、このようなことは、経験を重ねるに従っ

て、こどもの手によって行われるようになることが理想である。ただ、こどもが時間的に、また能力的にそこまで手が回らない時、教師がそれを自分の分担として割り切って行えばいいし、また、今回のミュージカルでは、プロローグの部分を、担任の2人の先生が創作し、自ら演じて下さったのだが、教師もこどもも同じように作る苦しみと楽しみを味わい、本番で同じ舞台上に立つということは、なかなか出来ない経験であるように思えるのである。

そして最後に、評価はしないのかという疑問が残るが、創造的活動の場合、いわゆる評価は無用であるという立場をとっている。すなわち、アイディアの連続である創造的活動においては、どんな些細な発見であっても、あるいは大人から見てどこにもある陳腐なそれであっても、こどもにとってはまさにかげがえのない発見であるから、決して否定することはできないし、また、たとえ肯定的なものであっても、それが教師の好みや理想を前面に押し出すことになってしまう恐れがあり、知らず知らずのうちにこどもの表現に制限を与えているということになりはしないか、と思うのである。創造課程の教室では、教師が教師であってはならず、シェーファーのいう「学習共同体」の一人となって、特別な権利や知識を捨て去らねばならないと思う。また、必要であれば、評価は、こども同志が相互に行い、その基準はこどもによって異なってよいであろう。また、本当に問題にすべきなのは、教師の仕事に対するこどもの評価なのであり、それは事後のアンケート(資料6)あるいは自由作文によって多少は知ることができる。

(資料6) ミュージカル「南の島の同窓会」についてのアンケート

(1) ミュージカルを作る過程であなたはどんなことをしましたか？

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| 1. 台詞を考えた (34)  | 2. 話のすじを考えた (19)       |
| 3. 衣装を考えた (9)   | 4. 大道具, 小道具を作った (9)    |
| 5. 音楽を作った (8)   | 6. 踊りを作った (5)          |
| 7. 歌の歌詞を作った (5) | 8. リーダーとしてみんなをまとめた (3) |

(2) 今までの(5年生までの)音楽劇と比べて今回のミュージカルはどうでしたか？

- |                   |
|-------------------|
| 1. 楽しかった (48)     |
| 2. 今までと変わらない (7)  |
| 3. あまり楽しくなかった (1) |

(3) (2)で1と答えた人はどうして楽しかったのですか？

- |  |
|--|
| 1. 自分達で作ったから (27)  |
| 2. 自分達の好きなようにできた(先生があまり口をはさまなかった)から (19)   |
| 3. みんなが同じように活躍できたから (5)  |
| 4. その他 今までの音楽劇と違っていたから (2) 顔に絵の具を塗ったりしたから (2) 自分の将来の夢がかなったようだったから (1) お笑いがあったから (1) 変な言葉を言ったから (1) |

(4) (2)で3と答えた人はどうしてあまり楽しくなかったのですか？

- |                                    |
|------------------------------------|
| 1. みんなで作るとき自分の意見が取り上げられなかったから (1)  |
| 2. 先生の指導が少なく、歌や台詞の練習が徹底しなかったから (1) |
| 3. 作ったり考えたりするのが面倒だったから (0)         |
| 4. 自分の役が面白くなかったから (0)              |
| 5. その他 (0)                         |

## 6. 実践を終えて

即興ミュージカルを、はじめて、小学校の普通学級の子ども達と共に作ったのだが、筆者達の信条として、作品の仕上がりの善し悪しよりも、今、子どもが喜んで作ったり演じたりしているかどうかを判断の基準として子どもへの対応を考え、そのことを通して、創造的活動における教師の役割とは何かを探っていこうとした。最終的に5. で述べたような4つの項目を提示したが、それまでには数々の思い違いや失敗があった。子どもを救ってやろうとか、よい方法を教えてやろうなどというこちらの勝手な思い上がりや、子どもの欲求とかみ合わず全く意味を持たなかったり、思わず自分のアイデアを押しつけて、かえって子どもの創造的活動の妨げになったりした。また、途中、子どもの活動が滞った時期に、担任の先生方にも協力してもらって、多少指導を加えようとし、そのことが子どもの反感を買った。そういう時こそより慎重に子どもへの関わり方を検討するべきであったのに、間近に控えた発表会のことを考え、焦りの色が隠せなかったのである。

毎日が反省、そして発見の連続であった。自分達の好きなように作っていいとなれば、子どもの表現するもの全てが、私達に子どもの何たるかを教えるのである。話の内容、台詞の言い回し、音楽、衣装、どれをとっても大人にはとうてい真似の出来ない表現であった。大人が子どもに求める偽善的な美や徳といったものとは程遠い、テレビの影響を強く受けた俗世間的な場面が多かったのは印象的だった(地上げ屋、ヘビメタ、テレビのレポーター、男同志の結婚、娘の結婚話に一升瓶をかかえて飲んでもくれる父親等)。6年生ともなればそのような傾向は当然であろうし、それまで抑えられてきたものがこういう形で爆発したのかもしれない。もちろん、非常に夢のある現実離れた場面(夢を売るロボット、魔法でしか溶けない接着剤)や、意外な展開(魔法を使えるはずの魔法使いが、バナナの皮で初歩的な悪戯をする。)も子どもならではの表現として見逃せない。

特に音楽的要素に触れれば、一幕の「女の子の歌」(譜例5)、二幕の「ガッツ工業の歌(教師との合作)」(譜例6)と踊り、三幕の「はじまりの音楽」、「魔法使いの歌」、四幕の「バンブーダンス」の器楽伴奏と踊り、「海賊の歌」が今回作られた主なもので、一つ一つは非常に短い、それを何度も繰り返したり、別の場面でもう一度使ったりして、自分達の作った歌を声を張り上げ誇らしげに歌う子ども達であった。その他に、BGMとして既成の曲が1、2曲使われ、どの幕においても多く使われていた効果音は、特に動きに合わせてするものがうまく芝居のなかに生かされていたように思う。

また、今回は全ての子どもがステージの上で何らかの役を演じたが、従来の、何人かのソリストだけが目立ち、後は踊り、コーラス、楽器等のその他大勢的役に回されるような不平等を、子ども達が認めるはずはなかった。短い制限時間を守って、あのように限りなく公平な状態に近付けようとした子ども達には頭が下がる思いだ。

自分の表現を自分で作る。子どもは、大人ほどそのことを億劫がらない。ほとんどの子どもはそれを望んでいるのに、そのようなチャンスをとことく取り去っているのが教師かもしれない。シェーファーは「どんな先生にもできる最上のことは、生徒の心にあることがらの火種をうえつけることだ。それがそだって、おもしろいかたちをとっても、いいではないか。」と言っているが、火種をうえるどころか、水ばかりまいて、大人になってからどんなに火を付けようとしても、湿った火種は使いものにならないというようなことになりかねない。そういう訳で創造的でない大人は多いが、少なくとも教師は、子どもの創造的表現を理解し、保証するために、自らが創造的であろうとする努力を怠ってはならないであろう。筆者達はそのような思想に基づいて、教材の開発を続け、今回のような実践を繰り返し行っている。また、このようなことを子どもを知らない教育

学部生へどのように伝えていくかは、そう簡単なことではないことを痛感している。第二章では現時点で行っている、大学での実践を報告する。

## II

先にも述べたとおり、目の前にいる子ども達に最もふさわしい教材は何か、しかもその学級の全ての子どもにとって等しく自主的かつ創造的でありうる教材を見出すことは至難の技であろう。しかも、そのことこそ、現場での実践におけるキーワードとして重要であるとするならば、異なった子どもの個性をそのまま認めて、大部分が満足するであろう教材を作ることに力を注ぐべきであろう。

すなわち、教材とは単に歌うための「歌」、演奏するための「曲」を指すのではなく、子どもが何らかの音楽的活動（パフォーマンス）をするためのきっかけとなるもの全てを指すのである。そうでなくて、単に教科書にある曲を順に歌っていくだけでは、かえって表現意欲を無くすような例が巷に氾濫している。たとえ、どのように言葉巧みな指導をもって子どもをその気にさせても、歌う内容が貧乏ければ、なおのこと虚しい——とさえ思うのである。

さらに、教師は子どもの前にどのようにして立てばよいのかについては、先に6年生と共にミュージカルを経験した際に述べたが、目の前にいる子どもに最もフィットした条件を作ることであり、少なくとも、作ることに匹敵したレベルの選択が必要になるといってよからう。それと共に、教師の姿勢、つまり子ども達の気持ちをどうとらえているかによるところが大きい。

筆者たちは、音楽教育の現代化という意味からも、音楽科教材研究をはじめとし、音楽科教育法、あるいは小学音楽Ⅰ、Ⅱなどにおいてする学部生のための教職専門教育においては次のような6つの柱に基づいてする各論を展開させている。

すなわち、

- |           |          |         |          |
|-----------|----------|---------|----------|
| 1. 動き     | 2. 楽器づくり | 3. 民族音楽 | 4. 即興的創作 |
| 5. ミュージカル | 6. 環境音   |         |          |

であるが、それら各項についてはこれまでも随時詳述してきているのでここでは改めて論をおこさず、平成元年度における音楽科教材研究の実践についての考察及び学生の反応、またそれらを展開する上での問題点にのみ触れることにする。

（音楽科教材研究）

教材研究はイ（国、英、教）、ロ（社、養、心、音、美）、ハ（数、理、体、家、技）各組それぞれ100前後のクラスで半期（100分×15コマ）の内容は次の通りである。

最初に模擬授業及びパフォーマンスの2本立てによってすることを話すと共に、各柱に即した指導法の展開例を子どものビデオをも交えて示す。それと共にどのようにしたら子どもが自立し、やる気を起こすかというポイントについて、従来の教師主導型のそれから脱皮することを強調し、その方法論として作る姿勢、あるいは作る経験を持つことによって他人のそれを寛大に許せるメンバーたる資質を養うべくこれからの予期する。その後、従来のやり方（自分たちが受けてきた）についての回想と新しいやり方の比較に基づく討論とその結果の発表、そして最終的には、オリジナルな教材を作り提出する。

## (指導法のサンプル)

- ・パーカッションコンサート
- ・サウンドハンティング&サウンドマップ作成
- ・トンガトン, サグゲイポによる即興アンサンブル
- ・群読及びラップによる集団パフォーマンス
- ・楽器づくり (お料理教室風)
- ・バンブーダンスのステップ及びその即興的伴奏作り
- ・図形楽譜による即興演奏

以上のようにいずれも作る事、あるいは即興演奏を中心としたパフォーマンスである。したがって以下、各科ごとに行う模擬授業も (合間に出てくる歌唱や器楽の技術にこだわらず) 作る事——創造性を主たるねらいとし、パフォーマンスをとまなうゆえ、常に笑いの絶えないそれであり、できるだけ、人前でことを行う上でのプレッシャーを除去するように努めている。さらにプリントを用意し、こちらからのメッセージ、毎時間毎の終りに提出させている感想文の用紙などを示す (資料7)。

## (資料7)

パフォーマンス; 一般用語としては「演奏」「演技」「上演」「遂行」などを意味するが、現代芸術の用語としては、既成の芸術の枠組みをはずれて脱領域的に行われる身体の行為をとまなう芸術表現のこと。——中略——回性や偶然性を重視する点では、ハプニングやイベントとも重なり合う部分がある。ただし、日本での流行語としては、もっと幅広く「社会にアピールする演技」といった意味で使われることも多い。

(朝日現代用語「知恵蔵」1990より)

## &lt;パフォーマンスの精神とこれからの音楽教育&gt;

- ・既成概念からの解放……従来の音楽教育に疑問を持ちながら、自分の中にしみ込んでいる既成概念から抜け出せない。殻を破って一歩踏み出すことがこんなにもおっくうだなんて! 「自ら作り出す」ことへの抵抗と不安。どうしてそうなったのだろう?
- ・自己アピール性……自分にしかできない表現があるはず。子どもには子どもの、大人には決して真似のできない表現があるはず。
- ・偶然性……本番何が起るか分からない、何がどうなってもそれはそれなりに面白い——そんな一見無責任な考えが、子供を救うこともある。「私の計画では、こういう指導をすればこういう力がつくはず。」だったら、指導案を書き上げた時点で教育は終わってしまう。
- ・即興性……日常の会話や行動はすべて即興。その時その時感じたままを表現するのが生活しているということ。子供にとって生活は芸術であり、芸術は生活である。
- ・脱領域……領域にこだわれば、専門性が追求される。専門家にするための教育ではないし、領域を越えることで新しい表現形態が見つかるかもしれない。

## &lt;音楽教育の目的について&gt;

音楽の活動を通して何らかの力を身に付ける——として、はたして音楽における力とは何なのでしょうか。

人はなぜ音楽をするのでしょうか。歌がうまくなりたいから歌うのでしょうか。楽譜が読めるようになりたいから、楽器を弾くのでしょうか。

音楽に親しめば、技術や知識はあとでついてくるものだと思います。その人が必要なだけの技術と知識ではいけないのでしょうか。もし、子供にある一定の技術と知識を与えてあげたいと本気で思うならば、まずは、それが必要だと思わせることです。

だけど、それがあまり必要でない音楽もあります。子供にとって易しく、面白い音楽があればそれを与えて、まず音楽を好きになってほしいと思います。

<こどもと作るパフォーマンスの授業>

一つの課題を子供も教師も一緒になって解くのです。

- 「一本の竹で何種類の音が出せるか。」
- 「家を出て学校に着くまでにどんな音が聞こえたか、それをサウンドマップに表そう。」
- 「目覚まし時計を集めて作曲しよう。」
- 「一枚の写真からストーリーを作り、音と動きで表現しよう。」
- 「四コマ漫画に音をつけよう。」
- 「破って作ろう（パフォーマンスの中に必ず広用紙を破って使う場面がある）。」
- 「群読を作ろう。」「面白い、もの売りの声を作ろう。」
- 「意味のない言葉によるコーラスを作ろう。」
- 「図形楽譜を使って作曲しよう。」「自然現象を音と動きで表そう。」
- 「動きのカノンを作ろう。」「絵描き歌を作ろう。」
- 「バンブーダンスとその音楽を作ろう。」
- 「ボールを使ったダンスとその音楽を作ろう。」
- 「がらくた楽器を作ろう。」「コマーシャルを作ろう。」
- 「世界の民族音楽を調べて、“なるほど・ザ・ワールド”風の番組を作ろう。」
- 「即興ミュージカルを作ろう。」

即興ミュージカル（台本や楽譜の介在しないミュージカル）

\* 5～8人くらいが適当

題材を決める



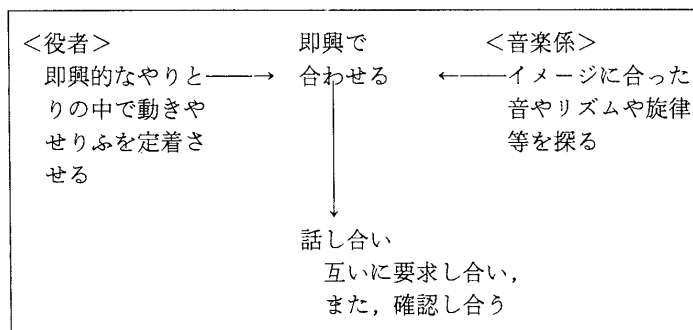
大まかな流れ（展開）を全員が把握する



役者と音楽係に分かれる



せりふ、動き、踊り、効果音、歌、バックミュージック等を作る



衣装、大道具、小道具をつくる



照明を工夫する



上演

（模擬授業の実践例）

- ・音によって連想したイメージを歌で答える（国語科）
- ・ボール遊びのリズムに合わせて歌い、即興的な器楽伴奏、動きを作る（国語科）
- ・グループでドラマをもった動きのカノンを作る（音楽科）
- ・動きによる即興劇「ブレーメンの音楽隊」（養護科）

- ・世界各地の雨量図と気温図を図形楽譜に見立ててする即興演奏と動き（社会科）

いずれも、各科別または無作為抽選によるグループを作り、教師の指示した課題について10～15分程度の打ち合わせ後、順に発表するというパターンが定着したようである。

- ・東西の絵画、彫刻を觀賞し、器楽の即興演奏をするとともに、作品を身体で表現するパフォーマンス（美術科）——名画をスライドで映写し、それぞれにふさわしい即興演奏をし、さらに数人で組み立て体操風にその画面を立体化するもので、エジプトの壁画、はにわ、墨絵、鳥獣戯画、ステンドグラス、千手観音、風神、聖母とキリストなどであったが、それぞれオリジナルであり、その名画に即した楽器及びその奏法に非常に説得力のある音が得られ、絵画に対する美術科の情熱が感じられるものであり、つづく、身体パフォーマンスは笑いの絶えないそれであった。

これらの実践に対しての学生の反応は次の（資料8）のごとくであった。

#### （資料8）

今日の授業でよかったことは、まずなんといっても明るく楽しかったこと——これが前提でなくてはなりません。音を間違えることを待っていて、しかもつらしく訂正を繰り返していく従来のそれではなく、間違っても明るく笑い飛ばせるような内容（教材）ばかりでした。

国語科の場合、全員が順にしりとりで歌うことによってする気楽なゲーム、続いて、言葉のイメージに合う歌を見つけることは、遊んでいるようで、歌は、その詞の内容からするイメージを歌いあげる（表現する）のだという、歌うことの本質に迫るものでした。さらに、楽器によるそれも音楽によってあるイメージを表現することにこそその存在意義があり、それを気楽にやるのがいいのです。（ひとつのイメージについて各班ともゆっくり考えて、それぞれを聞き合ってもよかった。表現された結果そのものは、たとえ貧しくとも、音を用いて、なんらかの内容を表現することによって、一人、あるいはグループでそれを形造っていく過程がもっとも大切なのです。

4年生の授業については、国語科との合科とも言え、即興的に言葉でつなげていくドラマの構成ですが、決められたテンポの中で即興的に「歌う」という点において、極めて（というより）限りなく高度な音楽的能力を必要とする教材といえます。

#### ◎みなさんの感想より

- ・国語科のイメージから歌を連想するというアイデアには感心しました。イメージから連想するものは人によって違うし、もっと一つのイメージを深めていったら、どんどんすばらしいものができたのではないかと思う。

- ・4年生の授業は自分で考えて歌わなければならないので高度だと思うけど、気軽に考えればどうってことない。

- ・楽器の演奏がいきなりでなかなか難しかったようだ。小・中・高でいじったことのない楽器が多いことにも気付いた。小・中でもっとたくさんの楽器を演奏する必要があると思う。

- ・このごろ思うのは、はじめの頃に比べて、みんなが前に出たときはずかしがらなくなったということです。これは、みんなの雰囲気がいよというこで、よいことだと思う。

Schall Spiel（シャル・シュピール）……楽音だけでなく、いわゆるノイズをも含めたあらゆる音によって、ある事象（ドラマ）を即興的に表現するもの。

素劇（すげき）……道具や衣装、楽器等を一切使わず、人間の身体だけで全てを表現する劇。特別な衣装を着ないので、より洗練された動きによって登場人物の特長を分かりやすく表現しなければなりません。大道具、小道具が欲しいときは、たとえば机や椅子、お城の門、池、ドア、並木道等、全て身体によって表現します。聴覚的要素としては、歌はもちろん、リズム、BGM、効果音にいたるまで、声とボディーパーカッション（手拍子、足拍子、指鳴らし、膝打ち、その他身体が発する音全て）によって表現します。

#### （エピソード）

これらの模擬授業を行っていく過程において、あまりに従来の技能的な音楽科の内容とかけ離れ



たパフォーマンス及び即興を主とする内容ゆえか——その意義についての討議を希望したクラスがあった。たしかに、従来のような技能中心のやり方に慣れてきた学生にとって、このようなやり方は興味本位に見える(ただ面白い)授業内容に、これで良いのだろうかという疑問を抱かせたのも無理はなく、いわゆる問題意識を持ち、より詳しい説明を求められた向きもあった。

すなわち、先述のように筆者達が音楽の技能面ばかりでなく、創造する音楽科としての構想についての説明(講義)は、いかように言葉で述べても理解しにくく、実際行う(パフォーマンスすることによってこそ実感することができ、その上で討論(従来との比較)して初めて、身に付くといった面もあることは既に予想していた。従って、最初に①従来のやり方についての概念砕き——②新しいやり方の実践——③討論——④レポートというカリキュラムにおける②において、③が待ちきれなかったのがあった。それらのいきさつは、次に示すペーパーに表われている(資料9)。

---

(資料9)

・ビデオを見ていて思ったのは、音楽と身体表現はくっついているということです。小さいころから動かさないと大学生の私達のように動けなくなってしまう。子供の表現を認めてやらないとできないことだと思うのです。

・人間は大人になるにつれて次第に創造性や表現力を失っていくような気がします。そうさせないための音楽教育が逆に創造力をつぶすようなことにならないように思うようになりました。しかし、まだ子供達をあの状態にまでどうやって引き上げればいいのかわかりませんので来週の方法論を楽しみにしています。

・でもやはり私には、パフォーマンスだけを音楽の授業でやっていくのには不安があるし、子供達の成長に何の意味があるんだろうかと思っています。パフォーマンスで使われている音一つとってもやはり“ドレミ”がでてくるし、そういう意味では果たしてパフォーマンスで能力がつくのか、それともはじめからある能力だけで良いのか疑問です。

・この授業で学んでいることは、今までの音楽教育の視点を全く変えることから始まっていると思う。今回、討論にまで発展したのは、その点から、みんなが(自分の経験とあまりに違うため)混乱し、いろんな事を感じ始めたためであろう。

・パフォーマンスが、現存の既成概念をこわすためのものであることは何となくはわかっていた。しかし、こわしてそれから先どうするのか?という疑問があった。しかし、今日授業を受けていて、こわしてしまっただけの状態にし、そこから、自由に、自然と生まれてくるものこそが音楽であるのではないかと理解することができた。だから、こわして、次のことは考えなくてもよいのだと思った。

---

しかし、結果としては、これらのエピソードによって一層我々の意図するところがより説得力を持ち受け入れられる結果になったことは最後にあげているオリジナルな教材が生み出されたことが物語っている。

(パフォーマンス)

模擬授業が早く終わり、時間が余った時、あるいは各科のそれが終わるとパフォーマンス大会であるが、その最も大きなねらいは、個人の能力をひけらかすことではなく、全員が必ず何らかのプレイをすることによって、人前ですることの痛みを分かち合い、お互いに共通の場に立ち、お互いの創造性を認め合うところにある。すなわち、自分は手をこまねいて他人のそれを冷ややかに観る評論家的存在は、作ることをモットーとし、こどもの自主性を育てていこうとする我々の当面の敵であるから——。

個人または複数でするパフォーマンスは、グラスハーモニカの演奏、フォークギターによる弾き語り、ジャズダンス、ミュージカル風寸劇……と非常に多彩であり、多くは身体を用いたパフォーマンスであった。

## (バーズセッション)

模擬授業及びパフォーマンスが一段落した頃合を見計らって10人前後のグループごとに、過去に受けてきた音楽教育と、今回提示された音楽教育のあり方について、40～50分の討論をし、グループごとに発表してもらうのが常であるが、そこでは、新しい理念や方法論への肯定的な面と同時に、それらを現場に持ち込んだ場合、先輩教師達の既成概念とどうかみ合えるかということへの不安も出される。また読譜指導の是非について、そのあり方が改めて問いなおされることも少なくない。そこにおいてこれらの創造的なやり方が、こどもサイドに立ち、その活動を生き生きしたものにしていく上で必要不可欠であり、どんなにか音楽の時間を活性化することに役立つことを力説し、勇気づけるチャンスにもなる(資料10)。

## (資料10)

- ・私の受けてきた授業は典型的な授業だったので、楽譜が読めることはいいことであって、そのことの欠点なんて考えたことがありませんでした。でも今日、先生がそのことについて話している間、ずっと民族音楽のことが頭にありました。私は民族音楽はとてもしばらしいと思っています。あの音楽と、楽譜のことを考え合わせると、私の受けてきた授業も少しずつ色あせたものを感じてきてしまいます。
- ・私としては楽譜を読めなくても音楽を楽しめれば良いと思うが、その子供が中学にあがった時、その中学の先生が“がくふせんもん”の先生の時(本当はがくふせんもんの授業はキライだけど現実問題として)その子供は困るのではないかと疑問に感じた。
- ・子供のために楽譜を教えているのではなく、教師の教育の都合上教えているということが分かったような気がする。
- ・読める人は頭で音楽を感じるが、読めない人は身体で音楽を感じることができることが利点のように思えた。
- ・ぼくは楽譜が読めるほうがいいのか悪いかの問題で、読めないより読めたほうが当然いいと思っていた。なぜなら毎年学校で暗写譜大会をやっていたし、テストでいろいろな符号の意味をテストさせられたりしていたからだ。とくに暗写譜大会は一体何の意味があるのだろうと小学校低学年の頃から疑問に思っていた。今現在自分は楽譜を読めない。でも今まで音楽の授業を受けたきたのも事実だ。考えてみると自分が音楽がいまひとつ好きになれなかった理由に楽譜コンプレックスがあったのは確かだ。楽譜なしの音楽というのはあまりピンとこなかったが、感受性や創造性や想像力はたしかだと思う。
- ・私は楽譜が読めないことを悪いことだとは思いません。先生になったら、楽譜の読めない子が肩身の狭い思いをしないように教材の与え方を工夫したいし、楽譜なんてなくても音楽は楽しめるということの方を教えてあげたいです。

## (オリジナル教材)

以上、教材研究を中心とした講義(演習?)における学生との交流を通して、音楽教育がこどもにとって与し易いものとなるための過程において最も重要な、将来、教師となった場合のあり方について考えてきたのであるが、こども達に創造性を期待するならば、教師がまずそうでなくてはならないという観点から最終的なレポートに代えて、各自のオリジナルな教材を作って提出させる。それらの意外性に富むユニークさ、こどもらしさを引き出すためのオリジナリティ、新しい音楽性と、こどもらしい夢を思わせるテーマのいくつかを次に示し、大人のアイディアの枯渇を嘆く声も少なくなかったことをも付記しておく。

## —教材例—

- ・宝探しの地図をもとに冒険談を作り、音をつけてみる
- ・音と動きだけでする連想ゲーム
- ・器械音(騒音)で作曲しよう

- ・任意の大きさのシャボン玉を作り壊れる音を声で合わせる
- ・自分のテーマソングを作る
- ・ガムランを動物の鳴き声で真似しよう

## 要 約

学校での音楽教育に関わって、こどもの自然な成長、そして喜びに溢れた動きや、即興演奏を保証してやるための手立てとして、6項目のうち、それらを集約した姿でもあるミュージカル作りのあり方を摸索して久しいが、今回は、小学校6年生2学級が合同である卒業に際してのそれに参加させていただいた。1ヶ月間でこどもの自主的な活動としての即興性が、教師がなるべく立ち入らぬような配慮のもとに、しかもこどもにとって実に楽しい思い出として上演できたこと、さらにそれを支えてきたいくつかの条件として、特に教師のこどもへの接し方について実に慎重な配慮の必要性について再認識させられた。そのことは、とりもなおさず教育学部生に課されるべき音楽科教材研究・音楽科教育法においても、中心的に探求されなくてはならないことがらであり、動き・即興演奏・楽器づくり・民族音楽・ミュージカル・環境音などの重点的内容とともに、それらの核をなす最も必要な事項である。

それなくしては、いかに言葉巧みな指導をもってしても、専門教育ならいざ知らず、一般教育における音楽としては技能の断片に過ぎず、こどもの円満な人格形成は期待すべくもない。

以上の前提のもとに、学部生の既成概念からの脱却と、必ず人前でパフォーマンスするとともに、いくつかのシミュレーションによって、教師・児童の相互体験を積むのであるが、常に創造的に、明るく音楽をするための教材例を探求する姿勢を持ち、将来の教師像において、音楽や美術などの芸術科目の特殊性を認識したい。

すなわち、仲間どうしにおける、自ら手を汚してするパフォーマンスを認め合うことを通して、こどもにおいてしばしばその片鱗を見せる創造の芽を、いかに小さいものであれ見落とさず、伸ばしてやれる資質を持つことこそ、音楽科における今日的課題でもある。

## おわりに

ここ数年来、特にミュージカル——それも即興ミュージカルということについて、またその前提となる各要素について、幼・小・中などの各レベルにおいてどのように成し得るかを摸索してきた。その結果としては、どの発達段階においても、それぞれ良さが認められるが、中でも小学校中学年から高学年へ向けての児童のそれは花といえよう。

今回、碩台小学校のような伝統のある協力者が得られたことを感謝する次第ですが、宮崎学校長をはじめ、音楽専科の万谷先生、さらに6年1、2組の担任古川、中元両先生には実に適切にして理解あるご協力、ご指導をいただき、感謝に耐えません。

至らぬ稿ではありますが、これが出来ましたのも先生方のご寛慮と、こども達の素直な感性による集中力の賜と心よりお礼申し上げます。

(譜例1)

## 時間と空間を越える旅

じかんもくう - かんも こえ - るふ - しぎ - なたび - まほうつかいに

- なつ て そ ら を とぶ - うちゅうのい - きどまりまで -

(例) とってもきれいな ドレスをきて ひかるげんじのか-くんと けっこんしたい (例) ディズニーランドを けいせいして

マイケルジャクソンみたいな いえがほしい 網あ おおきく になったら なんになる ぼくには まだわか らないけど

わくわくするよど - きどきするよぼ - くのゆめはは - るかとおくまで - つづ - いてるよ - じかんもくう

わくわくするよど - きどきするよぼ - くのゆめはは - るかとおくまで - つづ - いてるよ

8

- かんもこえ - ーるふしぎ - ーなたび - まほうつかいに - なつてそらをとぶ - ーうちゅうのい

- きどまりまで - さようなら - にじゅっせいき -

適当にくらしてフェードアウト

(譜例 2)

## 南の島の同窓会

Piano introduction in 3/4 time, featuring a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The key signature has one flat (B-flat).

Vocal entry with piano accompaniment. The lyrics are: いたってどこ - にいたって ぼくたちはとも - だちだ いくつになっても - かりあおう

*Fine*

Vocal entry with piano accompaniment. The lyrics are: けんかしようよ - みんな - おいで - - ここは - ゆかいなみな - みのしま みんな

Vocal entry with piano accompaniment. The lyrics are: な - おいで - - ゆめを - は こぶしま - へ みんな

1. 2.

D.S.

(譜例3) 「はじまりの音楽」

木琴

ピアノ

(譜例4) 「魔法使いの歌」

ぼくは いたずらすぎな まほうつかい きょうもいたずらするぞ

(譜例5) 「女の子の歌」

いちどで いいから ゆめみ た い わたし  
の ころろ が はず む ま で

(譜例6) 「ガッツ工業の歌」

ガッツ ガッツ ガッツ ころぎょう おおがね もちのガッツ ころぎょう

## 文 献

- 1) R. マリー・シェーファー “教室の扉” (高橋悠治訳) 全音楽譜出版社 (1975)
- 2) 渡辺学・久枝隆子 “ミュージカル制作による教材開発の試み(2)(3)” 熊本大学教育実践研究 (1988) (1989)

(1990年5月21日 受理)